

第十二章 神功皇后（氣長足姫尊）

おきながたうしひめのみこと

おきながのすくねのおおきみ

おきながたうしひめのみこと

氣長足姫尊は、氣長宿禰王の女で、母を葛

城高額媛と申し上げる。幼少より聡明で、睿智

であらせられ、容貌はともお美しかった。（第20表 紀参考）

仲哀天皇の二年正月十一日、氣長足姫尊は皇后になられた。

（一九三）

仲哀九年（二〇〇）二月、仲哀天皇が崩御された。

氣長足姫尊は、仲哀天皇が神のお教えに従

わなひで早くお崩れになられたのを、お傷みに

なり、自ら、財宝の国（辰韓国、

後の新羅国）を求めようとお考えになった。

辰韓は、氣長足姫尊の母方の祖先天日槍の

故郷である。（第1・20表 参考。既述）

氣長足姫尊は、その辰韓の地に、いい知れ

ないなつかしさを覚えるのだった。

と、その辰韓は、ことあるう

に、拍収国に力添えして、いるのである。

倭国大乱当時、延鳥郎が拍収国の王となつ

てからというものの、辰韓は、属国となつた拍

収国に援助し、入知恵して、いるようである。

皇后は、とうあつても先ず、その辰韓を討

を行ない、あれこれ

いれえ 入知恵 157 880 2/3 915 928 2/3 920

いた 傷心 119 井上紀上 290 紀上 330 899 906 259 359

921^P
割愛 428^P

紀上332¹²斤
紀上332^末3斤

新羅征討
紀上329^注18

たなければならぬとお思いになつた。

■そしてまた歴史的に見ても、南端の地は箕

子の国であつた。箕子国を譲り受けた倭国に

は、朝鮮半島南端域を領有する必然的な権利

がある、と思つた。

▲辰韓が箕子から奪ひ取つた狗邪韓国の地

を、奪回した。

こうして、神功皇后は、▲辰韓征討を決意さ

れた。

なお、日本書紀に述べられてゐる、御笠

や、松浦などの地名説話について、

この物語にありては割愛する。

地名説話は省く述べた。

*

た なら 1378°
立ち並ぶ

不思議 924 3行
922

紀上334°
「為れ」とある

紀上334°
井上(上)294°
宇治谷上175°

おにえ 294°
最か

檀日浦 紀上334°
911°-1/2 新
紀上334°

辰韓征討

仲哀天皇が崩御されてまもない頃であつたろう

檀日浦にお立ちになつた神功皇后は、髪を

解かれた。足もとへひたひたと寄せる海は、

清く澄み、キラキラ輝いてゐた。

皇后は、その海に臨んで、最かに

こう仰せられた。

「私は、天神地祇の教えをこうむり、皇祖

の靈を頼りとして、滄海を渡つて、みずから西方を

征討し、辰韓と思ひます。その前に先ず、頭を海水に

すすぎましよう。若し靈験が有るものならば、

髪は自然に分かれて二つになるでしよう。

そして神功皇后は、群臣が見守る中、海の中

に髪を入れてすすがれた。すると、不思議な

すると、髪が自然から二つに分かれはじめた。

浜辺に居並らぶ者達の口々から、

「おお、

という、感嘆の声があがつた。

人々は、海中で漂う長い黒髪が、波間に揺

922^D-2/3

美 106^P

こと

116^P

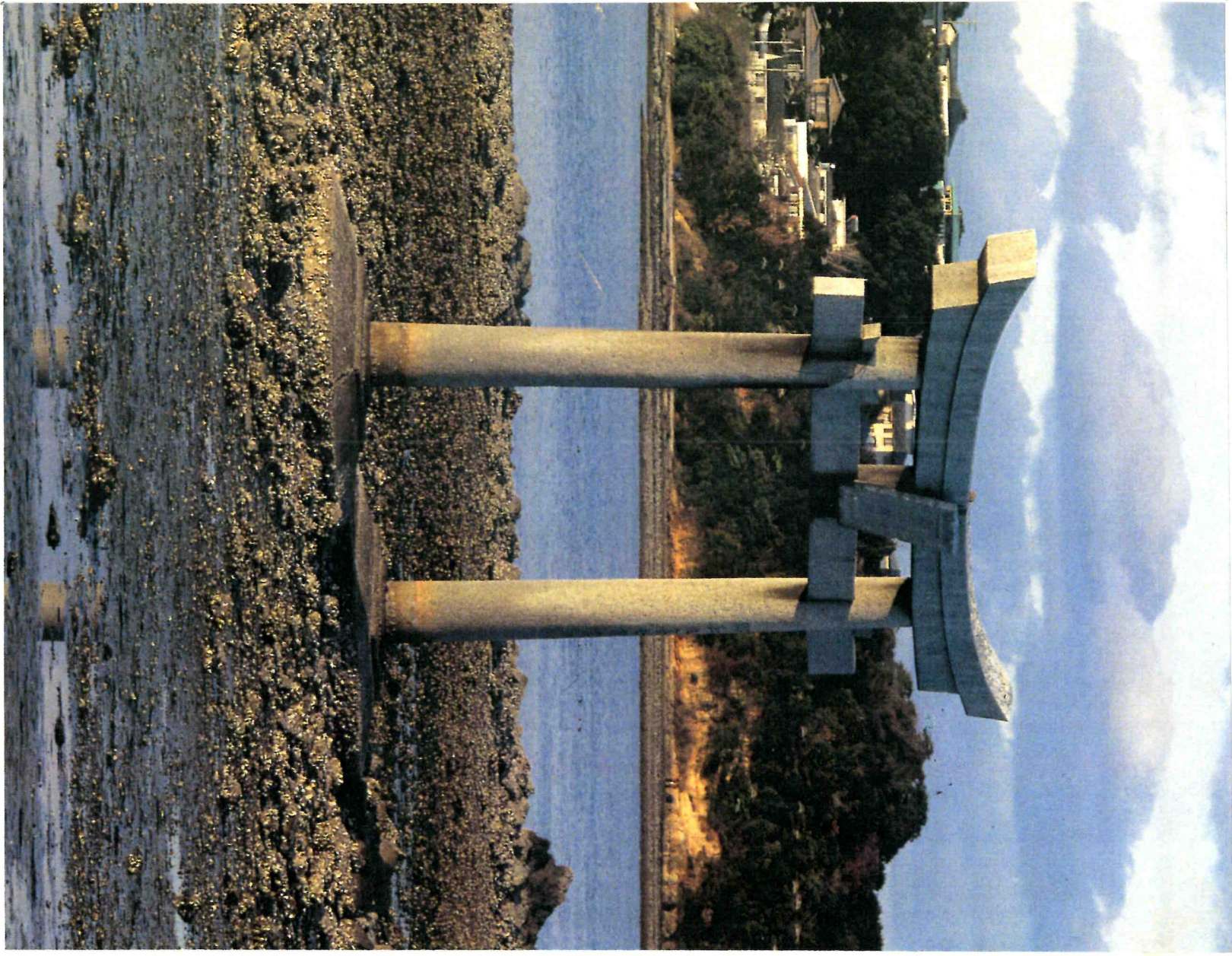
らぎ動いて
二つの方向へと分れてゆく様子に驚きあ
やしみながら見入った。
それは言葉で言い表わせないで済まない
神秘的な光景であった。(写真四版 199 参照)

*

風水を
押さえて
横に休ませる。

頁の上分には17
大に載せて下さい。

カ
↑



カ
↑

922^p - 3/3

1541^p 14^p

1404

1304

1204

但真図版 199 神功皇后ゆかりの御島
香椎宮・宮崎宮 神社紀行(23) 学習研究社 2003年4月24日発行、3頁参照。
神功皇后から香椎の二つ髪を髷に結び、男の姿になって出兵を決意したという。
瀬加満ちる下鳥居は波間に建つかのようになる。

923P

29
辛い 1504P
904P
939P-1/2

井上 294
宇治 176P
紀上 334P

あんき 80P
923P
紀上 334P 11行へ

皇后は、二つに分れた髪を結いあげ、
（たはねた髪、男子の髪形）になされた。
うおっしやった。
群臣に語りかけ、
「そのうち、皇后は、
群臣の助けによつて、
兵甲を起し、
高い浪を
渡り、
船を整え、
財土（長韓）を求めましよう。
もし、
成就すれば、
群臣がともに功が
あつたからであり、
事が成就しなかつたなら、
私は、
婦人であり、
また不肖でもありますが、
しかしながら、
いま暫く、
男の姿を仮
り、
進んで雄々しい計略を起し、
そうと思ひ
ます、
上は天神地祇の靈をこゝろむり、
下は
群臣の助けによつて、
兵甲を起し、
高い浪を
渡り、
船を整え、
財土（長韓）を求めましよう。
もし、
成就すれば、
群臣がともに功が
あつたからであり、
事が成就しなかつたなら、

224P

66

大カン134
紀上334P 假=仮

群臣たちは「皆こう言った」

私ひとりの罪であります。

私はこう覚悟していますし

不思議な感動か、並居る者達の身体の内を

かけめぐった。そーそーは人々の心を

異常な強い力で揺さぶった。

「皇后は、天下のため、そして国家の安泰のため

にお計りになつておいでです。事はかならず

お成就するに違ひありません。また罪が臣下

に及びはすもありません。私達は謹んで詔を

うけたまわりますよう。何なりとお申しつけ

下をしますように

臣下の者等の意気は高揚し、心は熱く燃え

上がっていった。

「我等が皇后・日の御子を戴いて戦う我が

軍は、ぎつと勝つたろう」

「太陽を背に、海を渡って戦うのだ」

「荒波の向こうの島と、財土を、勝ち

とうろぞ

鬼神のような力を感得し、日御子の御姿に下得も云

わぬ

勝利を確信するのだった。

企つ 664' 無茶 店 2154' 海北 宋村 港口 64'

次々一軒は「ニニ……」とある
「この」はヤナ
次々の「おはなわのヤナ」
大三南社

928-
1行
おはみわのやい
大神社

かいらん
太セ助同

()

宗像の大あいの達揚所
②570^P 1/2

ほころ
②2034^P
小文なや13

②933-3
16
927-1/2
和珥津紀上336条2所
たか②930^P18所

②930^P 427^P 10
H18.8.22
紀上335^P3所へ

前頁15^行 22に

中腹

②3339^P 6^行

皇九年九月十日条を見てみよう。こう記されて
いる。
「九月十日、諸國に令し、船舶を集めて
兵甲を練らふ。時に軍卒集む難し。皇后、
田はく、必ず神の心ならむとのたまひ、
則ち大三輪社を立てて、刀矛を奉りたまふ。
軍衆自づからに聚るしとある。
すなわち、「大三輪社を立てて、云々と
述べられてゐる。
「九月十日に諸國に令し、翌月の十
月三日に對島の和珥津を祭つた、というのた
から、立派な社が完成するのを待つて
刀矛を奉ら小たとは考えにくい。
あるいはあえていえば、阿蘇岳の近傍に
神功皇后は、大神神を祭るための小さな礼
拝所をお立てになつた。
その後、その場所に、各種の施設が建て増
されていつた。

③3338-1/3p ③930 927-1/2 ③3339 ③928-1/3 ③2630-1/2 ③928-1/3 1/2
 H16.1.23 阿蘇神社 Tel 16 (Tel 0967-22-0064) 山ノ神 北九州の旅 219 阿蘇神社 3339 582
 山ノ神 北九州の旅 219 阿蘇神社 3339 582

といふことなのかも知れない。
 ③また、さらに言えば、
 山阿蘇の中岳を御神体とし、山そのものを
 社壇（神を祭る所）と定めた為、一の鳥居・
 二の鳥居・楼門・宝倉・拝殿などの建物は進
 められ、水たが、
 水なかつたのであろう。
 と想像される。（「大神神社」中山和敬、学
 生社、四一と四四頁）「北九州の旅」旅
 研社、二一（九頁）（阿蘇中岳山頂の山ノ神）（参照）
 皇太后は蛇の舌のように千口千口と赤い火
 を吐く。神山に向かつて心からの祈願を行ない、戦
 勝を期して刀と矛を奉らせた。③927-1/2
 すると不思議なことに、兵士が自然に集ま
 ってきた。
 ＊

凡そ505P注2

凡そ505P
凡そ505P

凡そ505P
凡そ505P

928P
928P

凡そ505P
凡そ505P

2630-2/2

凡そ505P

和国の大神神社と同様(神山自体が御神体と
さし、別に神殿というものの無く、一
か造営さるにたとめられたのう。
(「北九州の旅」旅研社、二一九頁八山上神
社参照)
*
皇后は兵達を従え北を目指し下出発さ
れた。
とはいえ、阿蘇谷から鋭く聳え立つ外輪山の東
端部を越え筑後川上流域の山道を北上するにつれ
次第次第に兵の数が減っていった。
軍兵達の心の内には、言い知れない恐怖感
があった。
そこで、兵達は、皇后の目を盗む
ようにして逃げて行くのだった。
やむなく皇后は、ト占によって、神意を伺わ
れた。
辰韓(新羅)を伐とうと思ひ、軍兵を
集め整え、南の倭奴国を出で立ったという

のくに途中で兵達があつた。道が次々と消えてしま
います。一休、これはどうしてなのだろう
かし

すると、
「禍をなし祟る神があるからだ。その名は
大三輪神である」
という神託があつた。
（筑前国風土記逸文）
大三輪神へ参照）
筑前国朝倉郡に
そこで皇后は、此の神の社曰大三輪社を
樹てて、大神神の荒魂をお祭りになつた。

と考へてみた。いふまでもない。
となお

因みに述べると、福岡県朝倉郡三輪町弥永（甘木の北
三ノ吉）の曰大三輪神社（大己貴神社ともい
う）はこの当時の創建になるものという。
（「風土記」日本古典文学大系、岩波書店、
五〇五頁、注一七。「日本社寺大観」名著刊
行会、五五〇頁へ大己貴神社参照）
また、福岡県朝倉郡の曰大三輪神社一帯
の地名は、曰朝倉である。

一方、大和国の大神神社のすぐ南東には雄
略天皇から大和天皇まで出づいて、朝鮮半島へ向かう
道筋から大きくずれている。

と云ふことは言うまでもない。

前頁 次第次第に
風土記 505
OK

日
狗
邪や
韓かん
國こく
日
奪だつ
國こく

「早付」
前頁1949

コクヨ ケー20 20

カラー
右頁の右上(女頁)。はみ出して大きく掲載下さい。
全てゴチ
この線を横に配置
この線を縦に配置して下を

H1V

深江漁港

一貴山川

北

アミ点HV
青色バタ

杓不愛

深江集落

深江神社

旧唐津街道

国道202号 (唐津街道)

JR筑肥線

きみどり
黄緑

黄色

932¹-2/2

鎮懐石八幡宮

至唐津

至唐津

二丈浜玉有料道路

至前原

至前原

H1V
黄色

H1V

第228図

深江

鎮懐石八幡宮周辺図

福岡県 万葉歌碑見て歩き 梅林孝雄 海鳥社 2004年9月発行

78へ82頁参照

『新編 鎮懐石八幡宮の御神体』は寛永の頃造られた。その後西村石里人が発見したという。それを案内したからといって別物だという。

紀上336 1713
紀下26 末3行
天つ改行

紀上338
末3行

大屯み大け 218 接写
P 1/3
933 - 3

記(皇)177 末
記(皇)178 2行

武人 1941
2284

記(皇)178 2行
住持大神の荒神魂
とある 天(皇)930 紀上336

紀上336
1283

あげながら岸を離れた。
こうして航海を司る神へ住吉三神の
荒魂と和魂を奉じた船隊は、壮観
にも意気高らかに、北を目指した。
もつとも、日本書紀のこの箇所においては
へどの神の荒魂と和魂なのか
明確に述べられていない。
① かし、神功記の新羅討伐の末尾に、
「神功皇后は新羅国を御馬甘(御馬飼
と定め、白済国を渡の屯家(朝廷の直轄料地
と定めたまひき。しかして、その御杖へ神功
紀には「皇后の所杖ける矛」とある」もちて
新羅の国主の門に衝き立てすなはち墨江
の大神の荒御魂もちて、国守らす神として祭
り鎮めて還り渡りましき(海を渡りご帰還
になった)と
と記されている。
つまり、墨江の大神へ
へ住吉三神の荒魂か、南韓の地へ赴かした
ということが分る。

代(理)178
29行

紀上336¹²¹³
紀下26¹²¹³ 933^{P-2/3}

紀上 南945^{7/2} 異伝 紀上340^{注4}
③42^{7行} 紀上342^{7行}

② また、神功撰政前紀に述べられている異伝

には、神功皇后の辰韓征討の後のこととして

功のような記述がある。

つづのま、是に、軍に従ひし神表筒男・中筒男・辰

筒男、三の神、皇后に言へて曰はく、云々

とある。 従前でもよこ

・すなわち、

へ神功皇后の軍に従ったのは、佳吉三神で

あった。

という。

③ さらに、継体紀六年十二月条に、

夫、小住吉大神、初めて海表の金銀の国、

任那等を以て、胎中興言田天皇(応神天皇)に

授けまつり。云々

とある。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系

岩波書店、三三六頁、注十三参照)

*

の解説

高麗・百濟・新羅

中の仲哀九年十二月条

紀上340^{注4}

933^P-3/3

定期は531⁷ 前未で決まる

記出 198^元 武人 1941^元 元 198^元 25^元
 25^元 \ 2284^元 佐吉大郎の荒御魂

髪を髻に結びあげ、武人の装いに身を包んだ女王曰御子の御姿は、凜凜しくも、まはゆいばかりの美しさであつた。

太陽を背にして、滔々と打ち続く大船団は、

「そーれ」

「そーれ」

という掛け声も勇ましく、瀚海（玄海）を押渡つてゆく。

遙か彼方、大海原のただ中に、支國（壹岐島）があり、その向うに細長く連なる對馬國（對馬）がある。

こうして冬十月三日、對馬北端の和珥津（對馬がみあがた）の鰐浦（わにうら）から皇后の軍団は発つた。

その時、風の神は風を起こし、波の神は波立たせ、海の中の大魚さえこごとく、弾かんて船を扶けた。すなわち大きな風が追ひ風と

永 1928

同文 次 19 行

改行

改行

934^p

2000^p

924^p末
P脚3の改

優13 紀上334^p末3行
指揮 存分を1324^p尺う村

縦 脚 云 1290^p

なつて吹き、船は波の流に乗って、たちま
ちのうちに辰韓に至った。通り、我等に味方
し、助けて下さつておいでだ。すでに勝負は
決つたようなもの。我が軍が勝利するのは必定
のことです。さあ、津波のよう襲いかかり、
存分に戦いましょう。
男の姿を仮りて、果敢にも、自から軍を
指揮し、総帥の任に當る日御子の御姿には、兵
庫の心をふるい立たさむに、おかなしい、不
思議な妖しさがあつた。
皇太后の大軍団は、あたかも降つて湧いた
かのように突如辰韓の沖に現われ、王都自掛けてまじぐらに
突き進んだ。皇太后は兵庫にてまはきこした
指示を与えた。
渾身の気魄のこもる、美しいいなやかな
白い手が、空を舞つた。兵達は、その白魚の
ような指先の動きに魅せられ、その魔術にで
もかかつたかのように、十分の乱水もなく、
猛進撃していった。

版新 1575 とうてん 動 1709 たいめい 俄 1803 とうてん 突如 前 13 935P

うちめい 打物 197 武器 1803 うちめい 打物 197 武器 1803

版 13 現 水 版 6 新 津 波 突然

兵卒達は、まさに、皇后の意のままに、船
 をあやつり攻めたててゆく。
 すなわち、南の海の果てからやってきて、
 合図一つで沖合に群がった無数の船
 は、次の瞬間には旗をひるがえらせ、打ち物
 を鳴らしながら、みるみる浜辺へと近づいてい
 た。
 整然とした複数列の横隊となり、
 合図一つで向きを変え、
 一方、いままでも事なかつた海原の遙かか
 なたに、かつて見たことさえないほど多くの
 軍船が浮かび、その船団が突然逆巻く怒濤の
 ように襲い掛って来るのを見て、辰韓の王は
 気も動揺し、戦々恐々となり、どうして
 いのか分らなかつた。
 幾列もの横隊を組んで近づいてくる大軍団
 の勢いは、まさしく津浪のような激しさ
 であつた。

こあっ 凍り休 766
しん 880
叫 197

岸台手に居た頃
舟渡1場でもきこえるという
聞いたように思う。
936P-1/2

大玉と島に
音のり 448
1190P
528P

ヒキ 1589
響動めく 1622
不気味な 1925P
改訂

手の下しようにもなく、ただあれよあれよと
見て、いる間に、もう船の大群が岸辺近くにま
でも押し寄せてきた。白い水しぶきを上
げながら近づいてくる船。船の群れ。
そして、声を限りの響の響の響動めきと、打
ち鳴らされる連打の楽器の音とが、絶え間なく
耳をつんざくばかりに響き渡った。
■ いかもやがて、勢いが余って砂地に突っ込
む時に発する軋んだ音が、凄まじくも
とギギギギッ
と轟き、次から次へと続いた。
「おお、上陸するぞ。唯か、唯か、あの者達
を撃退せよ。早く行って追っ返せし
と、いかし、その時にはもう船という船から
飛び降りた無数の倭国の兵達、武器を手に
手にこちらの方めかけて、果敢に攻め寄せて
きていた。豪然と
■ なんと薄気味悪い入水、墨を、了精悍な顔
つきの男達の叫声に圧倒され、今までに
全く覚えのない凍り付くような恐怖が、辰韓
の兵達の背筋を走った。

見てみると ⑨938^p 1/3 15~2行 ⑩845^p 1/3 936^p 2/2

右往左往 175^p
175^p 992^p

こと

小林 538^p

175^p

辰韓の軍の武將達は、血の気もなく右往左
往する兵達を叱咤し、励ますのだった。が、
かゝる一度浮き足立った兵卒達を踏みとどまら
せ、倭軍に立ち向かわせることは出来なかった。
こうして、皇后の率いる軍勢の前になす術
もなく、辰韓は、朝鮮半島最南端部の
狗邪韓国^{コソコノクニ}の地を、倭国に譲り渡した。
恐らく、辰韓は、倭国大乱の最中に箕子達から取
りあげた、狗邪韓国^{コソコノクニ}の地を、そっくり倭国
へ返還した。
と、いうことなのであろう。と推察される。(第
十章「成務天皇」へ倭国内に置かれた三十は
かりの国々^{ミヤコ}の項において既述)
朝鮮半島^{コソコノクニ}南半部の国々^{ミヤコ}
中国の文献上から、狗邪韓国^{コソコノクニ}はな
らびにその周辺の諸国^{ミヤコ}につりて考察してみ
ることにしよう。(朝鮮半島^{コソコノクニ}南半部の国々^{ミヤコ})
先ず、魏志倭人伝^{ミヤコ}をみると、こう記さ

こと

三田元(五)II-581

三田元(五)茶 305P

①1485P(74文)

④1433-1/3 ⑤941P(74文)

⑥1486-1/4

「とこそか」

⑦928-2/3

いちがい

一概に ⑧121P

937P-1/2

魏志倭傳 38P

韓国古代史(四) 215P 237P

東洋史年 446P 韓国地図

魏志倭傳 37P 魏志倭傳 37P

とある(第229頁参照)

「神武東遷」安本美典、中公新書

てこれを取るとある(第229頁参照)「神武東遷」安本美典、中公新書

歳(辰韓の北にあった国)、倭みなしたかつ

「国、鉄を出す。韓(馬韓・辰韓・弁韓)、

院、俗稱「唐土城」より倭に至るには、海岸

に循って水行し、韓(朝鮮半島)南半部の三

韓。ここでは主に馬韓。今の京畿・忠清・全

羅道方面を歴て、乍は南し乍は東す。其の

北岸狗邪韓國に到る七千餘里。始めて一海を

度る千餘里、對馬國に至る。云々

「つまり、魏志倭人伝には、其の(倭の)

北岸狗邪韓國」と述べられてある。

「もつとも、この一文だけでは、

「三世紀初頭のころすでに、狗邪韓國が

倭國の属國であつたかどうかは分らない。

倭國の属國の一つであつたようにも読める

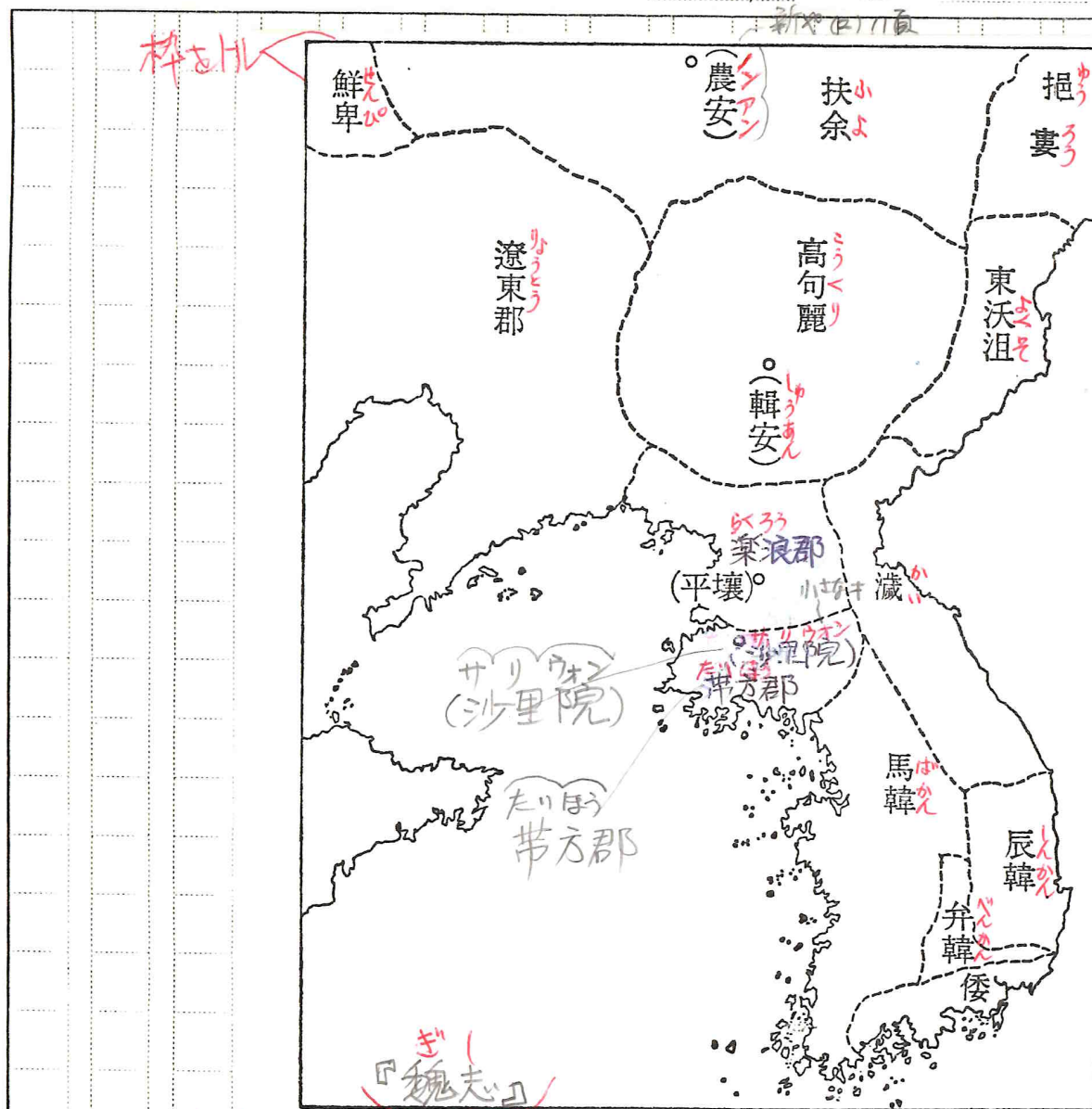
し、そうでないようにも読めるからである。

「ところが一方、魏志の東夷伝弁韓の条

に「

「弁韓

・右頁右上(女頁). 大きくはみ出し掲載下か。937^P-2/2



1409 第229図「東夷伝」による諸民族の地理的位置 (概略図)

『古代朝鮮』井上秀雄 日本放送出版協会 57頁 他参照。
87^P

981^P12

コクヨ ケー20 20x20

「これ」この頁18行板18

三国史II 茶 302
「古代朝鮮」井上秀雄 56-7「註」

三国史II 茶 305
天つ書 改訂

938^p

937^p-1/2 2^行

■そしてまた、魏志に韓伝を見てみると、

朝鮮半島南半部の韓諸国の地理的位置について、

次のように記されてゐる。

(1) 韓は帶方郡の南にあって、東西は海であり、

南は倭と接してゐる。

(2) 韓には三種類あって、馬韓・辰韓・弁韓

という。馬韓は西にあるし、辰韓は馬韓の

東にあるし、弁韓は辰韓と雜居してゐる。

(3) 弁辰のうちの瀆盧固は、倭と境を接してゐる。

という。なお、歳伝に、「歳は南方で辰韓と接し

てゐる」ともある。(「三国志」(II)筑摩書房、

三〇二・三〇五頁。「古代朝鮮」井上秀雄、

日本放送出版協会、五二頁参照)

すなわち、

① 魏志に倭人伝はの諸史籍によるものと、

朝鮮半島の南の海中、「帶方の東南大海の中

に倭があつたといひ、

② 魏志に韓伝はと韓

に接する南側、つまり朝鮮半島の南端部にも

倭があつたといふ。

■では、こうして、どう考えた
らよいのだろうか。
少々複雑な情況
云々

には ↓

天つぎ
改行

類似 940'-3/2

939^p

弁韓=新羅 新羅 38^p
72 2000 社 938'-1/3 85^p

(1) 従来、この二つの日倭国は全く別系統の
国であつたろう、とする説がある。(「古代朝
鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、五七頁参照)
(2) また、魏志倭人伝に記載されてゐる「狗邪
韓国」は、「倭国の属国でなくして」弁
韓(弁韓)十二国の一つ、金海加羅(慶尚南道、
釜山の西北)のことであつたろうとする説も
ある。(「岩波文庫」四三七〇「魏志倭人伝」
三八頁。「歴史読本」第十四卷第六号「十三
の邪馬台国」新人物往来社、一三二頁参
照)
——か——から、この物語において、
「紀元二〇〇年に、神功皇后が新羅(当時
の辰韓)を征討された」という日本書紀の記述は、概略、史実通りで
あろう。
——そして、帯方の東南大海の中に絶在する倭
国は、朝鮮半島の南端部を奪い返して、この
地を「狗邪韓国」と称したのであらう、

940P

(天の字改行)

下げる

前頁6行

下げる

938-1/3 944

HV 太字と推

「ようた」前頁13行頭

のてはなめらうか

(※要検討)

*

邪韓国とは、別の国だった

倭国の三十ばかりの国々の内の一つ曰狗

弁辰十二国の一つ曰金海加羅

いた

三十余国中の一国曰狗邪韓国と境を接して

弁辰十二国の一国曰瀋盧国は、曰倭国

とすると、

たふうは推察される。

(第2図参照。要検討)

国々の三十ばかりの国々のうちの一つであつ

国つまり、倭国の北岸曰狗邪韓国は、倭

941¹ ①486-①487 ②937-②938 ③1433-③1434
 ④937-④938 ⑤1422 ⑥937-⑥938 ⑦937-⑦938
 ⑧937-⑧938 ⑨937-⑨938 ⑩937-⑩938

海中に絶在する倭国は、大陸への足掛りといふべき狗邪韓国を手に入れたことによつて、朝鮮半島南部の諸国に対し、強い発言力を保持するに至つたのである。

⑦ 魏志西夷伝、弁辰の条に、
 国、鉄を出す。韓・歳・倭みなこれを取る。とある。

⑧ 第十二章 狗邪韓国（新羅）
 これは、西暦二〇〇年に倭国が辰韓（新羅）に勝利した後の状況を述べたものである。

⑨ 倭国は、神功皇后の大英断によつて倭国内の一国となつた。

⑩ 倭国は、任那・任那加羅・任那日本府などと呼ばれたのち、と考へてみた。

663年 白村2次 199
-562年 206 49
101

うらう
崇高 元1179
けだかくとういこ
改訂 神國の人が見た仲
改訂

天つき
改訂
942 P-1/2
改訂

紀小 491
OK

任那は、倭国の朝廷の直轄地として、
往古以来、長期にわたり、非常に重要視さ
れたのだった。
それにして、欽明天皇の二十三年（五二
二）に任那が新羅によって滅された後、
代々の天皇は、なぜ執拗なほどの任那
奪還政策を踏襲されたのだろうか。
それは大陸交通の要というべき基点にあるので、
これを押えることの意義は大きい。
いや、倭国にとって任那は、より以上に
大きな意味のある、かけがえのない大切なと
ころだったのではなだろうか。
任那は、天照大神（日御子、豊玉初代神
功皇后）の偉業によって打ちたてられた輝やか
い戦勝の記念碑ともいうべきところだった
のだろう。
天照大神の崇高な意志によ
って得られた財の国・任那の地を、新羅に奪
われて、ただなるところなく見てゐるにと
など出来なかつた。た（よう）に思われる。
だから、任那が滅されてから約百年後の天

942^P-2/2

1753 執拗 495 前26 663年 壬午 6月 紀1-495
562年 紀1-495
562年 紀1-495

智二年(六六三)に唐・新羅連合軍と白村江
で戦い、大敗を喫するまで、朝鮮半島への出兵を繰返
す。たのめ、とうとうと現到される。

*